

平成27年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」
教育課題に対応するための教員養成カリキュラム開発

小学校における21世紀型英語教育のための教員養成カリキュラム開発
調査研究報告書

平成28年3月

鹿児島大学教育学部英語教育講座

様式第 10 (無断複製等禁止の標示)

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、国立大学法人鹿児島大学が実施した平成 27 年度「総合的な教師力向上のため調査研究事業」の成果をとりまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。

1. 小学校教諭へのアンケート調査結果報告

鹿児島県内の 44 小学校、537 名の先生方にアンケート調査（アンケート用紙は巻末に示す）を実施した。今回は、因子分析、二要因分散分析、一要因分散分析、t 検定を実施した。

その結果、一要因分散分析、二要因分散分析においては有意な差は出なかった。有意な結果が得られたのは、因子分析、t 検定であった。以下、因子分析、t 検定の順に結果を報告する。

1.1. 因子分析 分析方法（全体）

- ・年代別（20 代以下，30 代，40 代，50 代以上） [最尤法 Promax 回転]
- ・教員歴（20 年未満，20 年以上） [主因子法 Varimax 回転]
- ・英語の教員免許（免許有，免許無） [最尤法 Promax 回転]
- ・英語教育の指導経験（3 年以下，4 年以上） [主因子法 Varimax 回転]
- ・クラス規模（20 名未満と担任をしていない，20 名以上）
- ・このうち，英語の教員免許有群は 30 人と少なかったため，分析を行っていない。

1.1.1. 因子分析結果（1）

- ・全体的にほぼ同じ因子が出現している。1 つ目が英文法や単語，文字認識などの『英語自体の指導法』，2 つ目が異文化理解や小学校英語教育の理念などの『小学校における英語教育について』，3 つ目が授業でゲームや歌をどのように利用するかという『授業方法』の 3 つがほぼ全ての分析に共通してみられる。
- ・以上のことから，概ね年齢や教員歴などに関係なく，小学校で英語教育が始まるにあたり，1 番目が英語自体をどのように指導していくか，2 番目が小学校での英語がどのような理念に基づき，異文化理解をどのように進めていくか，3 番目がゲームや歌をどの

ように授業に取り入れていくか、ということになると思われる。

- ・3番目については、英語の speaking と関わっていると捉えられているようである。

1.1.2. 因子分析結果（2）【英語の発音や音声に関する指導法について】

- ・30代以下の教員は単語や英文法などの指導法と別で独立したものとして考えている一方、40代以上の教員は英文法と同じ範囲の中で捉えていたり、reading や speaking と関わりがあると捉えていたりするなど年代によって捉え方が違うように思われる。
- ・このような英語の音に関する捉え方は、英語免許を持っていない群や指導経験が短い群にも見られているため、経験やもっている知識により捉え方の違いが生じてくる可能性が高いと思われる。
- ・ICT機器の使用方法や英語教育に関するサイトについては、全体の因子分析時には削除項目となっているが、年代別や教員歴などで集団を分けた際の因子分析では、因子項目となっていることもあり、関心がないということではないと思われる。

1.2.1. t 検定

上記2つの分析において、有意な差が見られなかったため、各要因を2つに分けてt検定を実施。因子分析の結果で得られた因子と各質問項目について検定を実施。ここで使われた因子は、全体の因子分析結果を使用。

- ・年代別（30代以下，40代以上）
- ・教員歴（20年未満，20年以上）
- ・英語の教員免許（免許有，免許無）
- ・英語教育の指導経験（3年以下，4年以上）
- ・クラス規模（20名未満と担任をしていない，20名以上）

1.2.2. t 検定結果

- ・第1因子の英語の指導方法については、教員歴20年未満の群は、20年以上の群に対して指導方法と知りたいと強く考えている。第2因子の小学校における英語教育に対しても同様の傾向が見られている。また、第3因子の授業方法に対しては、男性よりも女性が、英語の免許取得者より免許無資格の方が、強く知りたいと考えている。
- ・各項目間においては、アルファベット指導法について教員経験の長い者より短い者が、40代以上より30代以下の方が高い関心を示している。同様のことが異文化理解の指導法や評価の仕方、ICTの活用にも言える。また、教員経験の短い者は、文字認識の仕方や単語や文字を書くことなど英語の文字自体に対する関心も高い。さらに、英語の教員免許を持っていない者は、持っている者よりもゲームや歌をどのように授業に取り入れるかに関心も持っている。

1.3. 分析結果（全体）

- ・今回の分析では、年齢や教員歴などの要因別で因子分析をした結果、ほぼ似ている因子構造であったため、分散分析では結果が見られなかったと推測できる。t検定からは年齢が低い方、教員歴の短い方が関心の高いように感じられるが、教員歴が長く、年配の方と意識の違いが大きく出た部分とも言い換えることができると思われる。
- ・教員歴が長く、年配の方はコミュニケーションの原理や異文化理解の仕方、授業へのゲームや歌の利用の仕方などには高い関心があるが、その部分は他の群も興味のある部分であったため、差が出なかったものと思われる。また、小学校で英語を教えることに対する意識の違いも反映された可能性も考えられる。教員歴が長く、年配の方は、英語自体の指導法よりも楽しく、英語に馴染んでいくという考えを持っており中学校で教えるような教科としての英語とは区別しているのではないかと推測される。

1.4. 結論と展望

今回のアンケート調査結果から、見えてきた内容に鑑みて、今後検討していくことが必要であること。具体的には以下のことになりそうである。

- (1) 必修科目としてどの教科を置くのか。その数をどうするのか。さらにその教科の担当者を誰が担うのか。
- (2) 選択必修科目としてどの教科を置くのか。その数をどうするのか。さらに、その教科の担当者を誰が担うのか。
- (3) (1), (2)に関しては当然、それぞれの教科の目的、内容、評価をどのようにするのも明記されないといけない。
- (4) さらに今後、附属学校、ならびに教職大学院との協力を含めて議論していくことも必要と考えられる。

2. 岐阜県多治見市立笠原小学校視察報告～英語授業の取り組み～

2.1. はじめに

小学校英語教育を目的としたカリキュラム構築のために、現在、公立の小学校として先進的な英語の授業への取り組みを実践している岐阜県多治見市立笠原小学校を、平成 27 年 11 月 27 日（金）に視察した。笠原小学校は、平成 14 年に幼保小中一貫教育の取り組みをスタートさせ、平成 15 年に文部科学省の英語研究開発学校（～27 年）として指定を受けた。視察を行った平成 27 年には、5 期目の指定を受け（～29 年）、これにより現在に至るまで連続して 13 年間、英語研究開発学校として英語授業に向けた独自の取り組みを行っているとのことであった。

なお、当日は先方のご厚意により、午前中は小学校で配布資料に基づいたカリキュラム説明を伺い、その後第 4 学年のクラスで社会を題材とした英語授業を視察した。また午後からは、笠原中学校の英語の授業も視察する機会を設けていただいた。

2.2. 5 期目の研究開発課題

視察を行った平成 27 年度は、5 期目の研究開発課題として新たに「国際社会において必要とされるコミュニケーション能力を育成するため、小学校第 1 学年から英語科を開設した場合における中学校の教育課程も含めた 9 年間を通じた系統的な教育課程、指導法及び評価方法の在り方についての研究開発」*という内容が掲げられたとのことである。特に視察当日の説明会では、英語能力を養うにあたって、小学校から中学校まで、連続した 9 年間という長期的視野に立った授業への取り組みをこれまでよりも一層重視し、小中連携の在り方を今まで以上に検討していく予定であることが強調された。具体的な研究主題としては、「生き生きとしたコミュニケーションを図る児童を育てる指導の工夫」が掲げられ、そのための実際的な手法として「笠原型コンテンツ・ベイスト」と呼ばれる独自の方法が取り入れられている旨伺った。

上記の課題や方法を前提として、実際の授業でどのような工夫がされているか、小学校の方々の説明や授業視察を通じて本学の視察担当者が気がついた点を以下に報告する。

*以下、「」内は、笠原小学校提供資料（『平成 27 年度東濃地区英語教育改善研修会・第 2 回運営指導委員会 資料集』〔平成 27 年 10 月 14 日（水）〕）からの引用を示す。

2.3. 英語の授業をとりまく環境の整備

目標に掲げられた授業を実践するために配慮がなされている点として、まずきめ細やかなネットワーク構築が挙げられる。すなわち、英語の授業をより実りあるものにするためには、それぞれの教師が単独で授業の在り方を工夫するのではなく、人と人との様々なつながりを築き上げ、互いの情報交換や切磋琢磨など、人と人との交流を深めることが、授業をより良いものにしていく鍵となることを実感させられた。このつながりは、主として縦のつながりと横のつながりに分けることができる。

(1) 縦のつながり

具体的に、まず縦のつながりについて報告する。上記でも述べたように、笠原小学校では、小学校における外国語活動の推進に先立ち、幼保小中一貫という形で、幼稚園・保育園の時から子どもたちが外国語に慣れ親しむ環境を早くから取り入れた。このシステムは、地域的な特性を活かしているという側面もあり、人の入れ替わりが多い地域ではこのような一貫した流れを作る取り組みの効果を確認することは困難かもしれない。そのような地域では、子どもの成長を見続けることができないからである。

幼稚園・保育園にはネイティブのALT教師が付き、子どもたちは、都会と異なりふだんネイティブ・スピーカーと触れ合う機会が少ない場所に住んでいるという条件下でも、幼い頃から彼らと触れ合うことに抵抗感を覚えなくて済むという環境にある。また日常生活においてネイティブ・スピーカーと触れ合っているため、耳が英語に慣れた状態で小学校に入学する。そのような効果の表れとして、視察当日、実際に第4学年の授業を参観した際、どの児童も短い言葉を使ってのクイック・レスポンス、表情を伴った発話が日常会話の中で自然に出来ており、気恥ずかしさを全く見せない様子が伺えた。外国語を使ってネイティブ・スピーカーと触れ合う素地が、随分早くから出来ている様子が顕著に見られた。

次に、小中連携については、実際に互いの学校同士で頻繁に行き来するなど、人と人の顔の見える交流が丁寧になされていることがわかった。具体的には、情報交換のために、互いの学校の授業参観や合同研究会が行なわれている。教師同士の交流としては、月1回小中英語交流が行なわれ、小学校から教頭・教務・研究推進委員3名、中学校から教頭・教務・小中兼務教員・英語科教員がそれぞれ出席するとのことであった。ねらいは、小中における授業の系統性を図るためである。この交流において、特に小中兼務教員の果たす役割が重要であると伺った。小中兼務教員は、中学校に所属し、授業では小学校第6学年と中学校第1学年のクラスを担当する。この教員の役割は、小学校の外国語活動の内容を把握し、中学校への英語指導につなげる橋渡しをすることである。実際に中学校1学年の生徒に「小学校外国語活動で扱っている教材・教具、活動方法をできる限り取り入れ、小中兼務教員が中心となって指導することについて」アンケートをとった結果の報告として、この兼務教員がいることにより「緊張せずに分からないことを聞ける」「自分が大体どれくらいの力かわかってくれる」「同じ先生だから、今までの英語がたくさん使えるし、緊張せずに話せる」といった感想が挙げられており、連携のために欠かせない存在であることが裏付けされていると言える。

3番目の特徴として、小学校と中学校の児童・生徒が交流を深めることを目的とし、コラボ授業を行なっていることも、縦のつながりを強化するという点で大きな効果を果たしていることがわかった。具体的には、毎年3月に、中学校第2学年と小学校第6学年が、英語の交流授業を行なっている。学校側の説明によると、この交流により、中学生にしてみれば、上級生として自分が習った英語を教えられる喜び、また小学生には、中学校への憧れを抱ききかけとすることができるとのことであった。結果的には、中学生と小学生

の双方にそれぞれモチベーションを高める効果が期待できることがわかった。

(2) 横のつながり

小学校と中学校の教師同士が交流を図るだけでなく、小学校の中でも教師全員での研修会が定期的に行なわれていると説明を受けた。これは、他教科で学習した内容の相互確認を主な目的とする。E研修と称し、ロールプレイング、英語で授業をする練習、クラスの週報に英語を活かす工夫などの話し合いが行なわれる。また例えば総合学習で扱えそうな題材・使えそうなものは意識して英語につなげられるよう、教師同士でアイデアを出し合い、新しい授業方法の在り方へとつなげていく。夏休みには研修も行う。さらに、意識して他教科の教師も英語に触れる機会を持つよう心がけることにより、15人中英語免許所持者は3人という実情であるにもかかわらず、教師全員の英語へのモチベーションが高いとの説明であった。視察当日は、実際にどの先生方も児童と英語で自然に挨拶を交わしている光景が見受けられた。

次に、英語に対する保護者の協力も大きいとのことであった。「笠原の子は笠原で育てる」との意識を持ち、PTAバザーで英語注文の屋台を設けたり、PTAの活動事業として親子で英語の勉強会を開催するなど、保護者も外国語活動に積極的に関わっているとのことであった。

この他、国際交流の日を設けて地域の留学生を招いたり、児童会が主催してハロウィンパーティーを開催するなど、児童間で外国の文化に触れる機会を多く設けることにより、英語を中心とした異文化への興味・関心につなげる工夫が様々な場面でなされていることがわかった。

(3) 日常生活

小学校では、日頃から児童が自然に英語を目にする機会を増やすため、いろいろな工夫がなされていた。まず、廊下の掲示物を英語表記にしていることが特徴として挙げられる。視察当日も、教室までの廊下の至るところに、英語で書かれた様々な掲示物があった。教室や階数の英語表記はもちろんのこと、校内マップ、人気アニメのキャラクターを用いたクイズ、習った科目に関連する単語を英語図表にするなど、廊下を歩きながら英語で遊べる・学べる環境が充実していることが実感できた。このような工夫により、児童は自分たちの学年で習った英語のみの枠に捉われず、他学年の科目で習う英語やそれに関する作品を自然な形で目にすることができ、広く英語の知識や語彙を増やす効果が期待できると感じられた。これらの英語による掲示物は、教師が中心となって作成するが、児童自身で工夫を凝らして作成したものもあり、おそらく作成する段階でも作業中に語彙を身につけることができると考えられる。

次に、校内放送も生徒が英語で行うという試みがなされていた。視察当日も、昼休みの放送、休憩時間の放送を実際に耳にしたが、これは放送委員の児童が毎日、同じ英語表現

を使って放送しているとのことであった。同じ表現を毎日繰り返し耳にすることによって、児童たちはインプットされたその表現をごく自然にアウトプットできるという効果が期待できる。目だけでなく耳にも日常的に英語に触れさせることにより、常に五感に刺激を与える工夫がなされていると感じた。

さらに印象的だったのは、学校全体が、英語に関して教師が完璧である必要はないと受けとめている姿勢であった。小学校の教師の場合、授業に携わっていく中で、英語を苦手とする教師がいるのは当然である。だがその場合、教師は最初から児童の前で完璧でなくてはならぬというプレッシャーを持つのではなく、先生も頑張っているという、頑張りの姿勢そのものを児童に手本として見せることで、児童自身が英語学習へ意欲を持つ励みにもなるという。教師自らが学ぶ姿勢を示して児童に教えるという方法は、教師と児童の双方にとって、真に学びとは何かに気づく良いきっかけになるように思われた。

2.4. 英語の授業を視察して

視察当日は、第4学年の社会をテーマとした英語の授業を視察した。以下、気がついた点について述べる。

(1) 他の教科との関連性

指導案からも伺えるが、英語の授業内容は全て、他教科と関連させた内容になっており、現在他の教科で学習している内容を英語で表現するとどうなるかという意識が児童の中で芽生えるように工夫されていた。また関連した科目であっても、抽象的な表現でなく、あくまで生活に根ざした身近な題材と語彙を意識するよう工夫されていた。学校側の説明によると、過去に題材の複雑化により英語嫌いが増加したことがあり、その反省に基づいたということである。

(2) 文字に慣れ親しむ活動

英語を学ぶにあたって、音声だけでなく文字を学ぶことも大変重要であるが、小学校の英語授業における文字指導で気をつけていることとして、あくまで音声に十分慣れ親しんでいる単語を選んで文字学習に入ることが挙げられていた。すなわち、文字の方が先行しないように注意するということだ。その順番はかなり徹底されており、実際に視察した授業時間内においても、比較的難しいと思われる単語について、音声では繰り返し練習していたのに、綴りの確認は一度もなされなかった。フラッシュカードの使用もなかった。

(3) ジェスチャーの重視

授業を視察して印象的だったのは、英語の発話において全身を使って行なうという取り組み方であった。椅子に座って発話するのではなく、授業時間中ほとんど教室内をぐるぐる移動して、互いにいろいろな児童同士で会話を交わすということが行なわれていた。自然と、身ぶり手ぶりをを使って自分の伝えたいことを表現するようになる。これは、言葉だけを伝達手段とせず、ジェスチャーも含めた広い意味でのコミュニケーション能力を養うという点で、大変効果

的であると確認できた。

(4) ペア練習時の配慮

児童同士での会話練習をさせる際に、比較的英語が得意な児童と苦手と感じる児童のペアを作るという点に配慮されていた。事前にさりげなく配慮しているとの説明であったが、このようなきめ細やかな方法は、何気ないように見えても、どれだけ一つひとつの授業を丁寧に構築しているかが明らかになされる重要な点だと認識した。

(5) 授業半ばで、難しいと感じるところはどこかを質問させる

授業の途中で、教師が頻繁に、今のところでわからなかったところはないかどうか、児童に質問していた。途中で内容を振り返り、児童が理解できているかどうかを確認しながら次のステップに進むという配慮がなされていた。教師の思い描いている授業指導と、現実の児童の理解度にギャップが生じないように、常に進捗状況を確認することが大切であると考えさせられた。

(6) 授業の終わりに自己評価をさせる(コメントカード)・・・○△×

(5)との関連で、授業の最後に自己評価をさせるため、教師がカードを配布していた。児童には、例えば本日の授業で自分はジェスチャーができたか、相手の話を聞けたか、などいくつかの項目について、○△×の記号で評価をさせ、回収していた。このような取り組みにより、児童自身がその日の授業にどのくらい参加できたか、どの程度自分は授業についていけたかを客観的に確認することができ、次の授業への励みとすることができると感じた。

以上、(1)～(6)まで項目に分けて、授業視察において気がついた点を挙げた。全体として、ICTをふんだんに持ち込むなどの奇抜な工夫が凝らされていたわけでは決してなく、むしろ従来型のオーソドックスな方法で授業が展開されていた。にもかかわらず、授業の一つひとつのステップに細やかな工夫が施されており、それだけでも十分に児童が英語を身につけるための素地を作ることが可能なのだと考えさせられた。

2.5. 今後の課題

以上のように、学校全体における活動、また授業における工夫など、様々な規模で英語授業への取り組みが実感できた視察であった。学校側の説明によれば、今後の課題としては以下の2点が挙げられるとのことである。まず、このような幼保小中一貫教育、また小中連携の試みは、地域的に、一小一中だから出来た取り組みであり、他地域のように複数の小学校から中学校へ進学する場合にはこのような取り組みが困難だという実態がある。教師間の交流やカリキュラムの連携を円滑にしていくために、どのような工夫が必要かは今後の課題であろう。もう一つは、英語の授業への取り組みに重点を置くことによる弊害である。中学校での視察では、統一テスト等の平均点が、英語以外の教科で他校より低いのが現状であると伺った。中学校の場合、高校受験を視野に入れた受験対策としての英語の授業の在り方も求められ、また入試では総合点が評価されることから、他教科とのバランスを考える必要があることも今後の課題として挙げられた。

2.6. 視察を終えて ～教員養成カリキュラムに向けて～

以上、笠原小学校での英語授業視察を終え、今後大学で、小学校における英語教員養成のためにどのような授業が必要であるか検討するための多くのヒントを得られた。また小学校で、実際に授業をされている教師の声を紹介してほしい旨、学校側をお願いしたところ、以下のような回答を得た。まず、とにかくアクティブな活動が出来る授業を増やしてほしいとのことであった。特にネイティブ・スピーカーとの関わり合いの中で、自ら積極的にコミュニケーションをとろうとする態度、また物事全体に率先して取り組んでいくことができる学生を増やしてほしいとのことである。これは、英語に限らず、現代広い分野で求められている姿勢でもあろう。またこれと関連して、物怖じしない態度で取り組める学生も養成してほしいとの要望があった。この点についても、英語単独というより、教員養成全体を視野に入れた、より総括的な観点からのカリキュラム構築が必要であると思われる。今後のカリキュラム構築のための参考としたい。

3. 加藤学園暁秀初等学校（静岡県沼津市）視察報告

イマージョン／バイリンガルプログラム教育から見た小学校における英語教育の課題

3.1. はじめに

本調査研究事業では、「小学校における 21 世紀型英語教育のための教員養成カリキュラム開発」という主題の基で調査研究を行ってきた。英語学習の理想的な形態は、母語以外に外国語としての英語の二言語使用者、いわゆるバイリンガルを育成するということになる。したがって、現在、イマージョンプログラムに基づいて先進的なバイリンガル教育を長年にわたり実施していることで有名な静岡県沼津市の加藤学園の実情を視察することで、小学校における英語教育を行う際の注意点や有益な示唆が得られるのではないかと考えた次第である。

視察は、平成 27 年 11 月 12 日（木）に実施し、午前中は校長代行副校長のご案内とご説明を受けながら、イマージョンプログラムの授業とオープンプログラムの授業を参観させてもらった。午後は、加藤学園バイリンガル教育ディレクターとの面談を行った。

視察報告の前に、加藤学園の教育体制や教育理念をウェブページも参考にしながら紹介しておきたい。〈http://bi-lingual.com/index_j.php〉

3.2. 加藤学園の教育

加藤学園は 1926 年に創立され、幼稚園から高校までを備えた私立学校である。静岡県沼津市の自由が丘と岡宮に二つのキャンパスを持つ。自由が丘には、幼稚園、暁秀初等学校、高校があり、岡宮には、暁秀高等学校中学校がある。このうち、幼稚園と暁秀初等学校、暁秀高等学校中学校で英語イマージョン／バイリンガルコースとそのほかのコースが開設されている。

3.2.1. 加藤学園の「英語イマージョンプログラム」と「オープンプログラム」

幼稚園と暁秀初等学校の「英語イマージョンプログラム」ではカリキュラムを英語と日本語で行い、「オープンプログラム」は日本語のカリキュラムになっている。暁秀中学校になると、英語と日本語のカリキュラムによるバイリンガルコースと日本語カリキュラムによるコアコース、アルファコースが用意されている。暁秀高等学校では、英語と日本語のカリキュラムによるバイリンガルコースと日本語で実施される「進学コース、特進コース」、「アルファコース」がある。

3.2.2. 教科書とディプロマ

加藤学園は、学校教育法第一条に定められた私立学校（一条校）であり、文部科学省の学習指導要領に則ったカリキュラムが実践されている。したがって、初等学校英語イマージョンと中高バイリンガルコースであっても、文部科学省検定教科書の英語訳を用いるなどして、学習指導要領に沿った授業を実施している。また、中学校・高校バイリンガルコースは、国際バカロレア（IB）ミドルイヤーズプログラム（中等課程プログラム：MYP 2000 年認可）とディプロマプログラム（ディプロマ資格プログラム：DP 2002 年認可）校として認定されている。それゆえ、バイリンガルコース卒業生は、日本の高校卒業証書と国際バカロレアディプロマの二つの証書を取得することが可能である。

3.2.3. イマージョン

イマージョン(Immersion)の原義は「水などに浸すこと」であり、言語イマージョン教育とは、一般教科を外国語で学ぶ外国語指導方法の一形態である。新たに導入された言語を媒介として学習し、同時にその言語そのものも習得させようという教育方法である。一口にイマージョンと言ってもいろいろな使われ方をする場合があるが、「概して、一年間にわたって少なくとも指導の50%を第二言語を通して指導するプログラムをイマージョンとみなす。単一教科や言語科目を第二言語を通して指導するプログラムは、強化された第二言語プログラムと特定される。」(Genesee (1987: 1)) 多くの早期外国語イマージョンプログラムは、小学校全体を通して学校生活の少なくとも50%を第二言語で行うパーシャル(部分的)イマージョン、あるいは、最初の2,3年間を完全に第二言語で行うトータル(完全)イマージョンのどちらかの形式をとる。それに対して、トータルイマージョンプログラムでは、第一言語(L1)の読み書きは、第2,3学年まで導入されない。イマージョンとされる多くのプログラムでは、この50%という閾値を越えていない場合の第二言語使用の授業は、単純に「内容重視の外国語授業」としか言えないと述べられている。

加藤学園がイマージョンを効果的と考える理由として次の4点が挙げられている。

- (1) 実践的で意義のある学習状況で学ぶことによって、より効果的に言語を習得することができる。加藤学園のカリキュラムでは、言語習得経験の浅い子どもたちのために、子どもたちが知っていることや興味のあること、そして、自分の感情や意見を伝える機会を与えることによって、自然に外国語を習得できる環境を作っていく。
- (2) 新しい言語のコミュニカティブ機能の獲得には、興味深い授業内容を用い、やる気を引き出すことが不可欠。授業内容が子どもたちにとって意味のないものであれば、言語を学ぶことに興味が示されない。
- (3) 子どもたちは、第一言語習得、認識力と社会認識を関連させながら同時に発達させていく。言語と内容を統合することにより、第二言語習得にとっても、子どもの社会的、認知的発達に不可欠な一部となる。
- (4) 言語の形式的、機能的特性は、言語を使用する状況により大きく異なる。言語と学習内容を統合することによって、児童・生徒は幅広い状況において外国語を用いることになり、幅広い言語の習得につながる。

3.2.4. 加藤学園のイマージョンプログラムの目標

加藤学園におけるイマージョンプログラムでは、次の4つの目標が掲げられている。

- (1) 機能的な外国語力を習得すること(聞く・話す・読む・書く)
- (2) 一般児童・生徒と同じレベルの十分な母語能力を習得すること。
- (3) 各教科の授業内容を理解し、必要な力を習得すること。
- (4) 他の文化を理解し尊重すること。

3.2.5. 加藤学園のイマージョンプログラムの特徴

そして、加藤学園のイマージョン/バイリンガルプログラムの特徴としては以下の3点が挙げられている。

- (1)加藤学園のイマージョン／バイリンガルプログラムでは、文部科学省の学習指導要領に基づいたカリキュラムを実践。児童・生徒は、レギュラープログラム（イマージョンプログラムを導入していないプログラム）と同様のカリキュラム（算数・数学，理科，社会科，体育など）を使用している。
- (2)外国語で学習した授業内容を児童・生徒の母語で教え直すことはしない。ただし，日本語で実施されるテストや試験に対応できるよう，英語で学習した重要用語を日本語で復習する授業時間を組み込んでいる。英語で教えられた教材は，日本語では学習しない。日本語で教え直すことで，児童・生徒はイマージョンの英語での授業に耳を傾けなくなり，日本語での授業に頼ってしまう。レギュラークラスの児童・生徒にも見られるように，児童によっては学習内容を一度で理解するとは限らない。そのような場合は，英語で教材をもう一度復習する。
- (3)加藤学園の文化は，地域文化を反映する。加藤学園はインターナショナルスクールとは違い，児童・生徒に西洋的価値観を強いることはない。

3.2.6. 加藤学園のイマージョン教育の成果

加藤学園で行われるイマージョン教育の成果は以下の4つだとされている。まず第1に，外国語能力について。イマージョン教育のもとで育った児童・生徒は，従来の外国語の授業を受けた児童・生徒より優れた外国語力を身に付ける。児童・生徒は，通常，ネイティブスピーカーとなるには至らないが，同年代のネイティブスピーカーと機能的にコミュニケーションができる力を身に付ける。第2に，母語の能力に関して。イマージョンプログラムでの学習初期段階では，母語での識字発達が遅れをとることがある。しかし，小学校卒業時には，日本語のみで学習してきた児童と同レベル，あるいは，それ以上の母語力を身に付けている。第3に，授業内容の定着度合いについていうと，イマージョン児童・生徒は，母語のみで学習している児童・生徒と同じレベルに達する。第4に，文化の尊重という観点についても，イマージョン児童・生徒は，多文化をより理解し，肯定的な態度を示す。

もし，日本の小学校で本格的な英語教育を実施するのであれば，英語の到達レベルを上げるの前に，母語の能力を減じないこと，小学校でこれまで教えられてきた授業内容が薄められたり減ったりすることがないようにすること，さらに，自国や地域の文化を尊重することはもちろんのこと異文化理解も深めることが肝要であろう。その点で，加藤学園のこうした教育成果は，見逃してはならない重要な観点を教えてくれる。

3.2.7. 加藤学園におけるイマージョンプログラムの指導原理

加藤学園における英語イマージョンプログラムの指導原理は，次の3つの原則に従っている。

(1) 理解可能なインプット(Comprehensive Input)

学習者の習熟度に言語レベルを合わせ，概念を視覚化したり，実践的活動を用いて具体化するような指導を工夫する。さらに，過去の学習と結びつけたり，過去の学習の上に新たな学習を構築していく。また，常に理解を確認することで，初めて学ぶ子どもであって

も、十分理解が可能なさまざまな工夫が凝らされている。

(2) 体系的で広範なアウトプット(Structured & Extended Opportunities for Output)

ペアや小グループでのディスカッションを頻用し、生徒による発表を行わせる。生徒の参加やディスカッションを必要とするように他者に働きかけるような学習活動を促す。そのため、生徒が問題を特定し、問いかけ、そして、解決策を提示することができるように生徒主導で探求に基づいた課題を与える。

(3) 言語形式の重視(Focus on Form)

まず、生徒が難しいと感じている文法形式に焦点を置いた活動を計画し、口頭や作文などを通してより複雑な形式でこれらを用いる機会を設ける。さらに、生徒にとって現実的に意味がありコミュニカティブな文脈において、正しい形式をどのように用いるか学ぶことができるよう、特定の言語パターンを用いる必要がある活動を作り上げる。その際、生徒が自らの言語の間違いに気付く、訂正することができるように補助する。もし生徒が言語的誤りを頻出させる場合には、集中的かつ系統的にフィードバックを行う。

3.2.8. 加藤学園のプログラムの目標

加藤学園のイマージョンプログラムの目標を端的に表すと、「すべての児童・生徒が、より複雑でより正確な英語をより多く用いる」となる。これをもっと丁寧に説明すると次のようになる。

- (1) **すべての児童・生徒**：優れた能力を持つ一部の児童や生徒に限定されるのではなく、例外なくイマージョンのすべての児童・生徒が英語で自己表現することができるようになるようにする。児童・生徒は、英語で活動に取り組むことで、英語で話せるようになる。
- (2) **より複雑な**：児童・生徒は、より複雑で洗練された言語を生成する機会が与えられる。これには、重文や、より表現豊かな語彙、そして、複雑な文法形式が含まれる。
- (3) **より正確な**：児童・生徒は、自分が用いる言語を振り返り、文法や使用方法における誤りを自ら訂正し、より正確な語彙を用い、より目標に近い発音ができるようになることを目指す。
- (4) **より多く**：児童・生徒には、英語を用いる機会がふんだんに与えられ、短いフレーズや単文から始まり、より長い文章や言葉を用いる。その量と種類において常に多くの英語に接し自分からも発信する。

3.2.9. 各レベルで期待されている英語力と目標

加藤学園の各段階で期待されている英語力と目標は以下のようになる。

【幼稚園】

入園する子どもたちは英語経験が全くないか、ほとんど持っていないということを前提とする。幼稚園プログラムを修了した子どもたちは、クラス活動に関連した基本的な言語を理解することができ、1～2語文や短い文章によって伝達することができる。

【初等学校】

一般的に、加藤学園幼稚園以外から初等学校へ入学する小学1年生は、その英語力は経歴に応じて様々である。初等学校卒業までに、すべての児童が英検準2級に合格し、多くの生徒は、英検2級や準1級に合格することができる。

【中学校】

加藤学園暁秀初等学校以外から中学校への入学を希望する生徒は、確固とした一般科目の学力に加えて英語の力としては英検では3級以上、あるいは、同等の英語力が必要である。中学卒業時、大抵の生徒は英検2級に合格し、また、準1級に合格する生徒も多くなる。

【高等学校】

加藤学園暁秀中学校以外から高校への入学を希望する生徒は、少なくとも英検2級かそれ以上の英語力が必要である。高校卒業時、大抵の生徒は英検準1級に合格し、中には1級に合格する生徒もいる。また、TOEFL iBTにおいて少なくとも85以上に到達することが期待される。

3.3. 今回の視察を踏まえた上での今後の英語教育のあり方の考察

小学校に英語という教科を導入するのであれば、どのようなことを考えておかなければならないかということが、加藤学園暁秀初等学校の視察でずいぶん得られたように思う。そこで、今回の視察に基づき、また、入手可能な文献等の助けも借りながら、以下に観察した内容と、考察を箇条書きで示していきたい。

(1) 観察：加藤学園の教育体制

- ・日本の学習指導要領に沿った内容にするため、日本人教師と英語母語話者の教師がいる。
- ・ただし、ティーム・ティーチングをやるのではなく、それぞれ単独で授業を担当している。
- ・英語のネイティブ教師は、英語圏の小学校で教えてきたプロである。非常に優秀な教師ばかりであった。ただし、これらのネイティブ教師は数年で移動する人が多いので、人材探しが大変とのことである。
- ・英語のネイティブ教師は、独自の教材も豊富に使って授業をしている。
- ・英語のネイティブ教師は、一切日本語は使わない。
- ・英語で学習した後は、必ず必要な専門用語を日本語では何なのか確認させる時間が設けられている。ただし、日本語で教え直すということはやらない。
- ・授業料が高めなので、親の金銭的負担は大きい。

(2) 観察：加藤学園の子どもたちの英語力

- ・小学校6年生になると、算数や理科など高度な学習を英語で楽にこなせるようになっていく。
- ・ただし、ある程度の個人差が出てくる。
- ・各教室には、ビデオや英語の本があり、自由に使え、小学校高学年ではハリー・ポッターを原書ですらすら読める力がついている。
- ・副読本として海外の英語の教科書が使われていたが、日本の中学校や高校の英語の教科

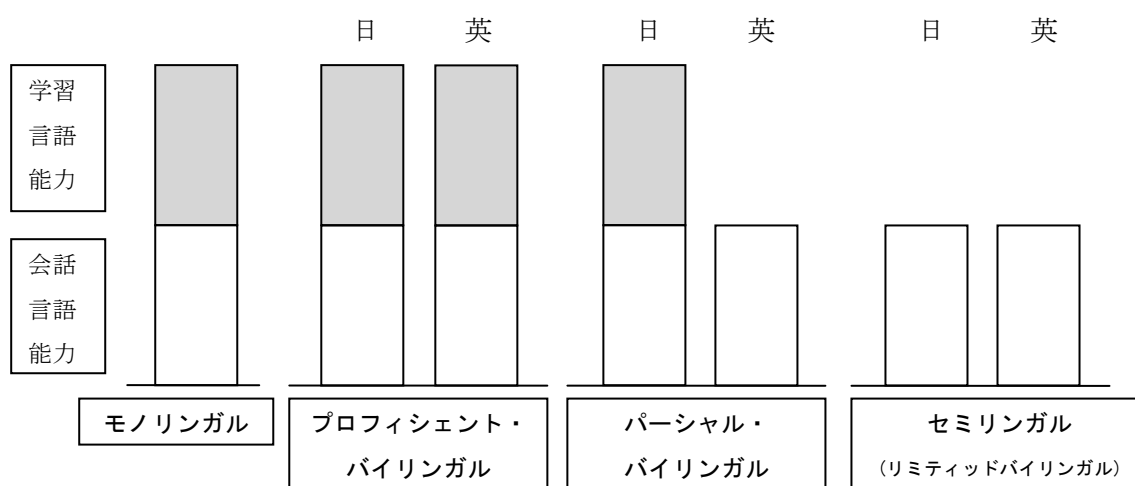
書よりもはるかに分厚い。

- ・オープン・プログラム（イマージョンではない日本語カリキュラムによるプログラム）の子どもたちの英語力は公立小学校の子どもたちとあまり変わらない。（オープン・プログラムを併設しているのは、保護者側の希望に沿うためとのことである。）
- ・幼稚園・小学校・中学校・高校と進学するにつれバイリンガル・プログラムを続ける子どもは減ってくる。
- ・医学部等の受験のためにバイリンガル・プログラムをやめる子どもがいる。
- ・「全国学力・学習状況調査」（いわゆる全国学力テスト）で加藤学園は1位の秋田県とほぼ同じ。
- ・全県の秋田と加藤学園1校がほぼ同じということは、英語で学習してもかなり実力をつけるが、やはり日本語での学習の方が高度な内容を学べる。

（3）小学校に教科として英語を導入するにあたって気をつけるべきこと

- ・外国語活動と英語の違いを明確にしておく必要がある。特に、小学校でやる英語の内容はどのようなものにすべきか、十分に事前に検討することが大事であろう。
- ・小学校・中学校・高校・大学を通して、英語教育をどのように体系づけるのかという系統的な視点が必要である。
- ・言語は、用いる個人だけではなく、その言語共同体の文化・ものの考え方を反映している。アイデンティティーの問題も考えなくてはならない。（高度な外国語の能力を身につけても、自らのアイデンティティーや文化的基盤を喪失しては身も蓋もない。）
- ・言語は使用場面と密接な関係にある。外国語活動は、日常言語能力（※日常言語能力と学習言語能力については後述）の使用場面しか考えていないことが多い。
- ・言語の形式・意味・機能をばらばらに考えるのではなく、最終的には、これらが統合され身に付くことが望ましい。（系統的・体系的な指導と学習）
- ・コミュニケーション能力の必要性が強く求められてからかなりの年月が経っているが、実際にコミュニケーション能力はついているのかということの検討がまず必要である。もし、コミュニケーション能力が十分には定着していないというのであったとしても、学習時期を早めればよいのかということの入念な検討が必要である。
- ・現在、タスクに基づいた英語学習が多く、これは、意味に焦点を置くが意味と形式とは関連している。形式と意味がしっかり結びつくような指導が大切である。（加藤学園は、形式と意味との繋がりを大事にしている。）
- ・欧米（言語系統の近い言語間でのコミュニケーション）でうまくいったやり方が、日本でうまくいくとは限らない。（韓国や台湾の事例は、欧米の場合よりも日本における英語教育により適切な示唆をもたらす可能性が高いと思われる。）
- ・グローバル時代は、なんでも統一するのではなく、個々の文化や言語を尊重する社会であるべき。
- ・高度に抽象的な内容は母語で学ぶ方がやはり有利である。日本人がなかなか英語を使いこなせないのは、日本語だけであらゆる高度な学問をやる体制を築き、英語に頼る必要性がないから、ということがよく指摘されている。

最後に、単一言語話者の言語能力からみたバイリンガル（二言語使用者）の言語能力について触れておきたい。モノリンガル（単一言語話者）にも2種類の言語能力があるとされている。（永井（2015: 55-60））すなわち、「会話言語能力」と「学習言語能力」とである。「会話言語能力」とは、その言語で日常会話ができる能力である。日常生活に必要な会話ができれば十分であり、必ずしも複雑高度な内容を話す必要はない。これに対して、「学習言語能力」とは、その言語で高度に抽象的な内容を伝達・理解できる能力である。中学校、高校、大学と進学するにつれて次第に高度で抽象性の高い複雑な内容を学んでいく。したがって、複雑で抽象性の高い学問を学ぶことがなければ、たとえ大人であっても日常会話に何も問題がなくても学習言語能力は十分には身につけていないということだっでありうる。さて、では、バイリンガルの場合はどうなのであろう。永井(2015)では、3種類のバイリンガルが図によって示されている。



理想的なバイリンガルはプロフィシエント・バイリンガルであろう。日本語も英語もどちらも会話言語能力・学習言語能力共に均等に身につけていることになる。したがって、どちらの言語であっても、日常のあらゆる場面における会話はもちろん、高度で複雑な内容に対処できるはずである。しかし、実際にはこのような例はきわめて少ない。通常は、パーシャル・バイリンガルの方である。図に示されている通り、日本語の方はモノリンガルのように会話言語能力も学習言語能力も身につけているが、英語の方は会話言語能力は十分であるのに、学習言語能力はないか、あるいは低い状態にある、というのである。しかし、日本語の方が会話言語能力・学習言語能力共にしっかりとしていれば、まだいい。悲惨なのは、セミリンガルの方だと永井は警鐘を鳴らしている。つまり、早い段階から英語教育を始めたために日本語も英語も会話言語能力のみで、学習言語能力はあまり身につけていないか、かなり低い状態にあるような子どもたちを量産するようになっては、大変なことになる。小学校で英語教育を行うのであれば、このようなセミリンガルの子どもたちをたくさん生み出すような事態は絶対に避けなければならないであろう。

参考文献

Genesee, Fred (1987) *Learning through Two Languages: Studies in Immersion and Bilingual Education*. Newbury House, Cambridge, Mass.

大川翔 (2014) 『ザ・ギフトッド：14歳でカナダのトップ大学に合格した天才児の勉強法』 扶桑社, 東京.

加藤俊徳 (2015) 『脳科学的に正しい英語学習法』 Kadokawa, 東京.

佐藤郡衛, 片岡裕子 (2008) 『アメリカで育つ日本の子ども：バイリンガルの光と影』 明石書店, 東京.

施光恒 (2015) 『英語化は愚民化：日本の国力が地に落ちる』 集英社, 東京.

苦米地英人 (2015) 『バイリンガルは二重人格』 フォレスト出版, 東京.

永井忠孝 (2015) 『英語の害毒』 新潮社, 東京.

西山教行, 大木充 [編著] (2015) 『世界と日本の小学校の英語教育：早期外国語教育は必要か』 明石書店, 東京.

山本雅代[編] (1999) 『バイリンガルの世界』 大修館書店, 東京.

山本雅代 (2014) 『バイリンガル：その実像と問題点』 大修館書店, 東京.

山本雅代[編著], 井狩幸男, 田浦秀幸, 難波和彦[著] (2014) 『バイリンガリズム入門』 大修館書店, 東京.

湯川笑子 (2000) 『バイリンガルを育てる：0歳からの英語教育』 くろしお出版, 東京.

4. ハウステンボス English Square 視察報告

平成 27 年 11 月 13 日に長崎県佐世保市のハウステンボス内に開設されている English Square の視察に行ってきた。この施設の開設に当たっては、社長と設立段階で筆者も関わっていたために興味も大きかった。特徴として以下の諸点が挙げられる。

- ・ハウステンボスという日本における異国を印象付ける環境において英語を学ぶこと。
- ・English Square の施設だけでは規模も設備も少なく、また小さいものであるが、米軍佐世保基地のアメリカ人家族のバックアップによってショートホームステイが可能なこと。
- ・英語教育専門のアメリカ人スタッフを雇用して短期間で効果を出そうとする英語教育を集中的に実施していること。

以上が特徴として考えられる。

一方、韓国の English Village を数か所以前視察した立場から言えば、規模や施設の充実においては韓国の Paju Camp や English Villages in Seoul City 等の方が圧倒的に規模も施設の充実においても格段に高い印象を持っている。English Square が今後どのような展開をとげていくのかはこれからの課題であろうと思う。なお、国内にはすでに韓国の English Village に類するものはいくつ也存在している。例えば、関西外国語大学、神田外国語大学、さらに中国地方の大学にも English Village に類するものが存在している。

こうした English Village に類するものが韓国では急激に増えたものの、その経営は赤字であり韓国では英語教育につぎ込む予算が本当に効果を出しているのか、Total Management の欠如として問題になっている。実際、韓国最大の Paju Camp の経営不振は大きな問題として存在しているのが実情である。こうしたことに鑑みると我が国に存在する English Village に類する英語教育施設が現在どのような状況であり、今後どのように展開していくのかは、注目しておく必要があるようだ。

5. 韓国・台湾の初等英語教育からの示唆

5.1. 韓国・台湾の初等英語教育からの示唆

まず、1997年の第七次教育改革に導入された正課としての韓国初等学校教育から考えてみたい。韓国は1982年から15年間を初等学校英語教育導入の準備期間として用意周到で1997年の第七次教育課程において初等学校3年から正課として英語を導入した。しかしながら、韓国の初等学校英語教育が本当に成功しているのかどうかははなはだ疑問ではなかろうか。例えば、2010年の12月初旬に高麗大学において開催された韓国応用言語学会において口頭発表された韓国の初等学校英語教育の現状は、驚愕に値するものであった。ソウル周辺の約6,300人もの初等学校の生徒を被験者として大規模な調査が実施されたもので、それによると学習が進めば進むほど、韓国初等学校の生徒たちは学習に対する意欲を無くしているという報告であった(Hyo-Sun Seo & Tae-Young Kim, 2010)。

韓国は、教育人的資源部が国策の一環として初等英語教育を導入してきて既に17年を経過したが、その成果は残念ながら極めて否定的で、英語学習が進めばすすむほど生徒の英語学習に対する意欲は減退していることが明確に調査から理解できた。初等学校英語教育がかなり効果をあげているという報告は公立の初等学校からは聞こえてはこないのが実情である。2020年に小学校英語教育を正課として導入予定の我が国の英語教育は、韓国のこの実情を精査しておくことが肝要である。

次に、台湾の初等学校英語教育に目を向けてみると、韓国と異なり、台湾の場合は、2001年に正課として初等学校に英語教育を導入した。しかし、韓国の教育人的資源部とは異なり、台湾の場合は、必ずしも政府（文部省）が決めたことを全て実施する必要はなく、実施可能な政策を中心として進めてよいことになっている。したがって、台湾の場合は、都市部と地方とでは初等英語教育において格差が存在すると言われている。我が国は、この台湾の実情にも留意して現状把握に努めることを薦めたい。

今後、台湾、韓国の初等学校英語教育を精査しながら、我が国の小学校英語教育を議論していくことは大切であるが、一方において、台湾、韓国両国ともに共通している部分は何であるのか、さらに明白に異なる点は何なのか、そして効果を挙げている指導方法、指導内容、教員研修の時期と方法、その担当者の問題なども併せて見ていくことが肝要である。

5.2. 国立台北教育大学初等学校英語科のカリキュラムからの示唆

日本のカリキュラムへ導入可能な科目

国立台北教育大学の初等英語教育学科とは異なり、日本の教員養成大学・学部では多くの小学校英語教育の為の受講科目を準備することは難しいかもしれない。しかし、台北教育大学の事例を参考に導入可能な科目の候補を挙げてみることはできるであろう。ここでは、必修科目を1科目、さらに選択必修科目として4科目を考えてみた。

【必修科目】

- ・ 小学校英語教材・教授法

【選択必修科目】

- ・ 入門英語音声学
- ・ 英語童謡指導法
- ・ 初等英語児童文学指導法
- ・ 初等英語演劇指導法

5.3. 言語活動

さらに、授業の言語活動においては、以下のような内容が中心となろう。

- ・ ロールプレイ (Role-play)
- ・ インタビュー (Interviews)
- ・ インフォメーションギャップ (Information gap)
- ・ ゲーム (Games)
- ・ 言語交流 (Language exchanges)
- ・ 調べ学習 (Surveys)
- ・ ペアワーク (Pair-work)
- ・ 教授による学習 (Learning by teaching)

5.4. 授業進行

授業の展開においては、主に以下のような内容が順次導入されることが望ましいと考える。(ここでは ICT に関して言及してはいないが、これは ICT 教材が出てきたときに導入することになる。)

- ・ 導入：挨拶、前時の復習 (Warm-up: Greeting/Review)
- ・ 口頭発表：対話、物語 (Presentation: Dialogue/Story)
- ・ 練習、ドリル：文型、語彙 (Practice/Drill: Sentence pattern/Vocabulary)
- ・ 言語活動、ゲーム (Activity/Game)
- ・ 終末：ふりかえり、評価 (Closing: Quick review/Assessment)

5.5. 各種英語活動コンテスト

小学校児童は、台北の英語教育のように各種英語活動コンテストを大きな学習の励みにしていることに注目したい。したがって、以下のような各種英語活動コンテストを導入することも検討してみてはどうだろうか。

- 歌唱コンテスト (Singing Contests)
- スピーチコンテスト (Speech Contests)
- 物語朗読コンテスト (Storytelling Contests)
- 即興スピーチコンテスト (Extemporaneous Speech Contests)
- 演劇朗読コンテスト (Readers Theater Contests)

小学校における英語教育に関するアンケート

鹿児島大学教育学部英語教育講座

このアンケート調査は、文部科学省の委託を受けて鹿児島大学が実施する「小学校における 21 世紀型英語教育のための教員養成カリキュラム開発」のために行うものです。具体的には、外国語活動が 3, 4 年生で実施され、教科としての英語が 5, 6 年生で教えられるようになった際、小学校で実際に「英語」および「外国語活動」の指導をするにあたってどのようなことを学びたいと現場の先生方がお考えかを調査するためのアンケートです。お忙しい中、大変恐縮ですが、ご協力をよろしくお願い申し上げます。
(なお、ご回答いただいた内容は統計処理を行うため、個人が特定されることはございません。)

I 回答者ご自身について（選択肢欄の該当する□の部分にチェック（☑）を入れてください。）

1. 性別について

男性 女性

2. 年齢について

~24 25~29 30~34 35~39
40~44 45~49 50~54 55~

3. 教員歴

5 年未満 5~9 年 10~14 年 15~19 年 20 年以上

4. 英語の教員免許について

中学校英語 1 種取得 中学校英語 2 種取得 持っていない

5. 小学校における英語教育（外国語活動を含む）の指導経験の有無について

未経験 1~3 年間の経験あり 4 年以上の経験あり

6. 勤務校（小学校）の担任クラスの規模について

5 名未満 5~9 名 10~14 名 15~19 名 20~24 名
25 名以上 現在担任をしていない

II 小学校における英語教育で学びたい内容について

小学校で教科として導入される予定の英語教育を行うに際して、教師が学んでおきたい内容についてお尋ねします。それぞれの選択肢欄の該当する□の部分にチェック（☑）を入れてください。

(1 そうは思わない 2 あまりそうは思わない 3 ややそう思う 4 そう思う)

英語理解の能力について	1	2	3	4
1 英語（の単語や文章）を読むことに関する指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2 英語を聞くことに関する指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3 英語の音声のしくみを学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4 英語の発音の指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5 英語のアルファベット指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6 英語の語彙の指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

英語表現の能力について	1	2	3	4
7 英語の文字認識の仕方に関する指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8 英語の単語や文を書くことに関する指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9 英語を話すことに関する指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
その他の指導法について	1	2	3	4
10 小学校英語教育の理念・理論を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
11 英文法の指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
12 コミュニケーションの原理を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
13 異文化理解の指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
14 ICT 機器（電子黒板等）の使用方法・活用方法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
15 評価の仕方を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
16 ゲームを取り入れた活動法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
17 英語の歌を利用した指導法を学びたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
18 小学校における英語教育に関するサイトについて知りたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

Ⅲ その他の質問（自由記述）

1. 日本の伝統文化を授業に取り入れるとすれば、どのような内容をどのように指導することが必要だと思いますか。

.....

.....

.....

.....

.....

2. 英語教育を充実させるために、その他に学んでおきたいことが何かあれば、お書きください。

.....

.....

.....

.....

.....

ご協力ありがとうございました。

小学校における英語教育に関するアンケートの自由記述

【その他の質問（自由記述） 1】

日本の伝統文化を授業に取り入れるとすれば、どのような内容をどのように指導することが必要だと思いますか。

- ・食文化の日本独特のものとアメリカなど海外の表的なものの紹介，比較などお互いのよさを知り合えるような活動があればよいのではないか。
- ・食べ物，行事(祭り)，スポーツなど身近な文化を体験を通して英語に触れることができると身に付きやすいのではないか。
- ・服装や道具，マナーなどを簡単な表記でイラスト，写真等を見せながら言い表せる程度でよいと思う。
- ・音楽，絵画，その他日本の生活様式を体験させていくことが必要。
- ・文化を英語で紹介する等。
- ・行事，建物等，音楽，着物，食
- ・郷土の行事・産物(文化)→自己紹介の中で(郷土の紹介等)
- ・日本の有名な祭りなどを地図で場所を示しながら。
- ・地域の伝統や文化を表すような指導ができればいいと思います。桜島＝火山≠山ではないなど英語の細かい違いにとまどったことがあります。
- ・実技を含めての指導があるとよい。
- ・実感を伴って誇りを持てるように体験的な活動や本物に触れる。観賞や話を聞く機会を持つ。
- ・アニメ，歌舞伎を動画で見せつつ，自国の文化を理解させる。
- ・発達段階に応じた伝統文化を知ったりお互いに伝えたりする活動。例えば，低：正月遊び等をカルタや神経衰弱等にして遊ぶ。中：中山→鹿児島市の伝統文化。高：鹿児島市→日本の伝統文化。
- ・衣…着物 食…和食 住…住まい，暮らし方
- ・日本の歌，文字，遊びなど実際に活動を行いながらどのようなコミュニケーションをしていけばよいか。
- ・茶道の成り立ちや作法について学ぶ(映像，体験活動)
- ・あいさつなどの礼法
- ・鹿児島には世界遺産があるのでそのことを紹介(場所なども)するような英語を学年に合わせてできるのかなと思います。
- ・子供たちにもできるような内容，習字，折り紙
- ・食文化や伝統芸能などを簡単な英語で説明する(単語で伝える)
- ・季節ごとの歌をきく，うたう。
- ・外国文化との違いに気づかせる内容。食文化，生活文化(衣，住)，音楽文化，絵画文化，伝統文化(能など)。まずは外国の文化を知ることで比較しながら日本文化に気付かせていくことが大切だと考えます。
- ・例えば「寿司」のように日本が語る文化を海外へ発信するための方策を考える授業など。
- ・日本及び自分の住んでいる地域の簡単な紹介ができるようにしたい。他教科，領域とともに横断的に指導できるとよい。
- ・身近な行事(正月や盆など)や技術の素晴らしさ建築などを子供が愛着，誇らしいと思えるように。海外へそのことを喜んで発信できるように。
- ・地域人材を利用したり，行動等を活用したりして指導する。ただし学習の狙いや流れ，内容等を詳しく打ち合わせる必要がある。
- ・薩摩川内市の伝統行事名を英語で言えるようにするなど身近なものから取り入れて現在，夏休みの課題で扱っているので授業でも指導できればよい。
- ・遊びの文化を比較(諸外国との)。似ているもの，独自のものなど。
- ・食生活や行事等他外国と比較しながらお互いの良さを認め合えるような指導をすること。
- ・県下でも有数の英語教育校において，子供たちの意欲知識には驚いている。現況では子供たちが日本文化について関心も低く文化体験も少ない。その中でどう位置付けるかということ地域の祭りや文化行事ではないかと思う。身近なところから思い起こし文化体系としてどこに位置付けられるかをスタートさせてから英語だと思う。
- ・日本の伝統文化をまずはよく知ることが必要だと思う。
- ・食事，かな，スポーツ
- ・習字，茶道などの場面を設定し，その場面でスキットなどをするとよいのではないのでしょうか。

- ・子供たちが自分の住む町を紹介するときにその地域の伝統的なもの(建物, 芸能)を扱えると思います。なるべく、子供たちにとって「身近なもの」を扱うほうが、コミュニケーションが広がると思います。
- ・いろいろな国の文化と比較しながらそれぞれの国の文化、日本の伝統文化の特徴やよさを感じられたらいいと思います。日本の伝統文化を紹介する。
- ・わかりません。日本と外国の文化比較？
- ・英語とは別にした方が良いでしょう。
- ・全国的に同じような内容で宗教等問題のないもの
- ・能や太鼓などを音楽の時間に
- ・他の教科とかねて(音楽など)
- ・外国の文化と比べて違いに気付かせる。
- ・伝統文化を他国の人に伝える指導
- ・日本の伝統、祭り、服装、言語、学校など子供たちにとって身近なものから比較しつつ教えること。
- ・カルタを英語で楽しむなど
- ・伝統文化についての知識や英文
- ・外国の人に分かりやすく説明させるようにすること。そのためにはどんなことを理解しなければいけないかを自分で考える。
- ・生活に関すること(衣食住)を外国と比較しながら入れていく。
- ・昔話を英語と方言で聞かすなど日本の伝統文化が英語でも表現されることのおもしろさや新鮮さを味あわせたい。鹿児島県の「なんこ」という遊びを英語で行わせるなど、昔遊びを英語でやってみるなど
- ・日本の文化に関する内容を他国と比較する形で学ばせる。子供たちに親しみやすいことから
- ・現在、他教科で既に扱われている内容やそれに近いものを教科指導と関連付け発展させる形
- ・和食の文化について。指導はうまく思いつきません。
- ・食文化や遊び、日常生活(1日の生活)スタイル等の内容を簡単に紹介すること。
- ・お礼、謙虚、謙遜、礼儀正しさ
- ・まず、郷土についてその特色等をしっかりと理解していること。その上で外国との共通点や相違点を見つけたり、幅広く相手の文化を知る機会を得たりしながら、共感をもっていろいろな国の様子、習慣、考え方等に理解を深めていくこと。
- ・日本の歌と外国の歌の比較など
- ・方言を外国語と同時に。
- ・華道、茶道、武道など歴史のある伝統文化を知る機会を設ける。ゲストティーチャーの利用を含む。
- ・おどり
- ・他教科との関連を考えて取り入れる。伝統文化を踏まえた内容。
- ・あいさつ、服装、ジェスチャー、有名な建物や行事等を他の国との違いを含めて取り入れる。
- ・外国の人に日本の文化を紹介する。
- ・例えば、楽器等であるならば実際触れさせてみて演奏してみる指導も必要だと思う。
- ・日本で古くから受け継がれているものやその素晴らしさ、日本語の良さ、面白さ
- ・各時代における文化について教科書や資料集などで調べるだけでなく、実際に触れたり、体験したりする指導をすることが必要。居住地などを調べ、文化について調べたり、触れたりするような指導が必要。
- ・地域の行事や風習を学ぶ
- ・和食(マナーなど)を外国の食文化との違い
- ・世界における日本文化の良さを理解を深めたい。
- ・鹿児島県の伝統文化について体験的に学ぶ
- ・衣食住などを海外の人に伝える指導
- ・伝統遊びで楽しみながら簡単に英語で紹介する活動
- ・折り紙の折り方を英語で説明する、日本の伝統文化の紹介を英語で行う
- ・昔話を劇にする。
- ・私見としては国語や総合的な時間などで学んだことをどう外国の方へ伝えるのかという内容を外国語活動で展開する必要があると考える。
- ・他教科との融合
- ・日本古来の文化を指導する必要がある。
- ・日本文化を外国の人にスピーチできるような内容が良い。
- ・広すぎてよくわかりませんが、折り紙で動物などをつくり、その動物の名前などを単語として学べたらと思います。

- ・身近にある日本の伝統文化について日本に根付いてきた背景やその良さについて考える。子供たち自身がそのよさを感じ取ることができるように指導することが必要だと思います。
- ・国々の食べ物など例に出すと楽しく学習できるのかな…と。
- ・伝統文化を外国の人に紹介するというような内容にすれば「調べよう」「どう伝えればいいか」と意欲をもって活動できると思う。
- ・世界遺産や伝統文化を英語で紹介する。
- ・スポーツなどの学習時、日本のものにもふれる。AEAが外国の人ならば学習の初めにその国の文化に触れる時間をもつことがある。その時に日本との違いを伝える。
- ・日本の伝統文化を英語教育に取り入れるというのは、程度の問題によると思います。小学校高学年でお茶やお花の文化に触れている子も少ないでしょうし…体験を通して言葉を教える場があったらいいですが難しいと思います。
- ・よくわかりません
- ・茶道を実際にお点前とか指導できたら、短歌、俳句を学べる時間、専門の先生に教えていただく。
- ・食べ物、着物
- ・日本の文化を外国の人に伝える。日本の文化を再認識するのではないか。
- ・日本と外国の文化の違いを紹介すること
- ・その文化の成り立ちをゲストティーチャーをまじえて指導することが必要
- ・日本の伝統文化と合わせてその文化を受け継ぐ人々の背景や置かれている状況と他国との関係など。
- ・行事、他国に同じような行事がないかなど比べながら
- ・今のカリキュラムでは異文化理解の内容が少ないのもう少し内容として増やしていくことが大切だと感じている。
- ・衣食住に関する文化、食文化、伝統工芸など後世に残したい、残すべき文化を総合学習などで学ばせたい。
- ・児童が身近に感じているものからその起源を知るなどして考えを深めていく指導。
- ・日本の伝統文化を総合的な学習で調べ、そのよさを紹介する。
- ・日本の文化の良さ、特徴を紹介する。
- ・国語教育の充実を図る
- ・地域に根差した伝統文化を体験を通して指導することが必要。
- ・自身の文化を誇りに思えるような内容であること、自身の文化であると自覚が持てるような素材を選ぶ必要があると同時に世界に対してアピールできるのかどうか精選することも大事だと思う。
- ・年中行事を子供の経験を踏まえながら。
- ・食事、年中行事
- ・他国の文化の違いを知ること、理解すること、比較し、それぞれの違いを認め合う方向で進めていく。
- ・遊ぶものを外国の人に紹介できるようにするのは？
- ・外国の人が気に入る日本
- ・2020年、東京オリンピックが開催されることを伝え、外国の方々が驚く日本の文化を指導する。
- ・伝統行事や季節の行事、伝統工芸品、伝統芸術
- ・行事、ひなまつり、七夕のときのフレーズを言ってみる
- ・季節の行事を経験させる。
- ・季節ごとの行事の内容や伝統をその季節に合わせて指導する。
- ・自国の伝統文化を異国の人に紹介するなど
- ・比較してみると考えやすいし結びつきやすいのではないかと思う
- ・日本の音楽について実際のもを見たり、VTR等で学ぶ。日本の習慣、四季の行事等、良さが分かるとよいと思います。
- ・異文化の習慣や文化を知る活動の際、日本のよさ、伝統文化について改めて触れ、日本のよさを外国の人へ伝えられるようにするなど工夫していくと良いと思う。
- ・学習する内容に合わせて必要なことはどんどん授業の中で取り上げていけばよいと思う。外国と同じところや違うところを知ることによって子供たちは日本や日本語に興味関心をもつのではと思う。
- ・他の国の違いから意識させると良いと思う
- ・季節ごとの行事や民謡などを伝える。
- ・郷土の文化や行事について、史跡や偉人等児童の身近にあるものを入れたら分かりやすいと思います。
- ・テキストの作成、教材の作成
- ・地域で受け継がれてきた技術について子どもたちに紹介する活動。他国の伝統文化ともつながる人々の思いに触れられる内容がよい。自国文化の強調にならないもの。

- ・いろいろな国の文化があること。普段自分たちが行っていることは外国の統一したルールではないこと。いろいろな文化に触れさせる機会をつくりたい。
- ・外国人から見る日本の伝統文化のとらえ方と自分の認識との比較…改めて日本のよさを考える。また、異文化から見た日本の認識を得、それをもとに考えを深める。
- ・歴史にもふれながら取り入れていく必要があるのではないだろうか。
- ・外国の文化に触れる場面を設定し、そのなかで日本の文化にも目を向けさせ、それぞれの文化の良いところや相違点に気付かせることができるような授業を行っていききたい。
- ・昔話の英訳読み聞かせなど
- ・諸外国との違いを写真や映像を通して比較し、互いのよさを発見できるようにする。
- ・該当月に関する伝統行事をその月に入れながら、説明等を加えていく。
- ・自分達にとっては当たり前な日常や行事等も、外国人から見ると驚きの文化があると思うので、そういった内容を教材化した教科書のようなものがあると、指導が充実すると思う。
- ・※質問の意味がよく分からないので答えられません。
- ・まずは身近なものから。実際にみることができ、体験できる
- ・季節の行事等（七夕、節句）
- ・伝統音楽や楽器、芸術
- ・子どもが興味のある内容について精選し、それについて他国との共通点や相違点について指導する（文化のよさを味わえるように）
- ・芸術鑑賞会などで、日本の伝統文化を見たり、体験したりする。
- ・他校の伝統文化と比較する活動の中で日本の文化に気づかせたい。（伝統文化が何であるかをあまり理解していない子どもが多いように感じます）
- ・日本の伝統文化について理解したうえで（例 郷土芸能など）とり入れる。
- ・子どもにも身近なもの ・祭り（音楽、おどり、何を目的としたものか） ・年中行事
- ・日本語がそのまま英語で通じる単語などから、日本文化の再発見など
- ・祭りなど地域性を感じられる内容が身近でよいかと思う。
- ・「伝統文化をどう取り入れるか」となると、難しいかと思いますが、日本の文化と考えると取り入れやすいのでは。例えば、暦に即した行事、出来事などや古くからある遊びなどを外国の人に紹介する学習、という感じで。
- ・外国の文化と日本の文化の違いを比較し、尊重すること。
- ・お互いの国の文化を理解しあいながら、よりよいところを見つめあうような心がけが必要だと思う。体験を通すのが一番では
- ・日本の伝統文化は、日本語で教えるのが良いので英語教育の中で行う必要はないと思います。
- ・俳句や短歌を正しく伝える工夫をする。
- ・他の国の文化と比べたり、交流したりする。
- ・外国文化との比較
- ・行事、あいさつ等日本独特のもの（内容）、「異を尊び、同を喜ぼう」の精神で（指導）
- ・季節の行事を劇風にするのは、どうでしょうか。ちょっとレベルが…。
- ・英語専門の先生を配置してほしい。
- ・衣食住、伝統無形文化等、総合的に全体的に教員が
- ・季節行事についての説明
- ・類似する外国の伝統文化との比較をもとにそれぞれの独自性に着目させる。
- ・ハロウィーンの紹介と日本のお祭りやお盆のように比較してみてもは？
- ・日本の年間行事を紹介しつつ、同じ月に外国ではどのような行事があつて、どんなことをするのか紹介する。折り紙を英語でやってみる。日本と外国の文化を紹介する際に注意することは、どちらかが良いという優劣でモノを見させるのではなく、「知る」ということに重きを置くということである。
- ・昔から歌われている歌を歌わせる
- ・伝統文化については、異文化理解に関連させ、他文化を決して否定したり、不快に感じたりさせないような指導が大切。
- ・食文化→おせち料理の意味・願いもともに紹介
- ・行事→お正月・七五三などの行事の紹介
- ・洋服（着物）…成人式や卒業式で着る可能性がある。
- ・礼を重んじる文化（礼に始まり礼に終わる、といったようなしつけみたいなどころ）
- ・和食（はしを使って食べる、一汁三菜）

- ・何を「日本の伝統文化」と扱うかによって、内容や指導が見えてくるかと思います。
- ・自国の文化と他国の文化を比較して、ちがうところやそれぞれの良さ等について話し合う活動を行う。
- ・まずの身の周り（身近な地域）の文化から興味を持たせる。
- ・異文化を学びながら、日本特有のコミュニケーションの取り方（あいさつなど）を改めて考え、良さを理解する。
- ・道具・物などに実際に触れさせる。
- ・伝統文化を引きついでおられる方をゲストティーチャーとして招いて授業を行う。実際に目にしたり、体験したりすることが大切だと思う。
- ・総合で取り入れる。
- ・体験できるものを実際に行い、体感させる。
- ・日本のよさを伝える活動（意外と知らない子が多い）
- ・狭い範囲では、家族や地域の行事、体験活動
- ・外国人の方へ日本について紹介するなど
- ・例えば、地域、県、国、伝統文化を調べ、把握させ、外国との比較をさせたり、外国から見る日本の文化というような視点の工夫など
- ・外国文化と比較しやすい内容を視覚的に、また、体験を通して指導すること。（民族衣装を着てみる、楽器を演奏する等）
- ・郷土の歴史（島津藩、西郷家、明治維新、郷中教育など）を詳しく教えた指導
- ・外国人に紹介する活動をイメージして日本文化についても理解を深めつつ、英語（外国語）表現を身につけ、自国文化に自信を持たせたい。日本の遊びの紹介（お手玉、折り紙）、習字・書道、日本食（和食）、柔道・空手等？
- ・日本各地や校区（地域）の伝統文化・芸能を教材化し、地域の方々との交流活動を通して学ぶことが大切である。その活動の中に、ALTや外国の方々を招待し、日本文化を学んでもらう。
- ・上記の前提条件となるかもしれないが、各教科、道徳、総合などで、日本の文化の知識を理解しておく時間が必要である。
- ・日本独特の食文化、芸術、芸能分野などを実際に体験させる。
- ・生活科や総合で、昔から伝わる芸能や食など
- ・身近にある伝統的なものに触れたり体験活動をすればよいと思う。（折り紙、けん玉、かるたなど）
- ・見る機会があまりない伝統芸能の映像を見せたりする。
- ・日本の歴史・文化を英語で紹介する方法について
- ・日本の伝統文化が海外でどのように紹介・認識されているかを伝える。
- ・日本の伝統文化の内容を正確に伝えることと、外国との文化と比較しながら伝えることが大切だと思う。
- ・日本の伝統的な楽器にふれさせる
- ・英語教育の中では、文化の比較程度でよいのではないか。
- ・「話す」、コミュニケーション能力の視点で、説明するための指導法
- ・衣・食・住に関することを、外国のものとの比較を中心に指導する必要があると思う。
- ・日本の文化やその地域の祭り等を、その歴史や概要を日本語で抑えさせた上で、何を伝えたいか考えさせる
- ・能、狂言、歌舞伎、神楽等を外国の友達に紹介する
- ・地域の伝統芸能を紹介する。
- ・短歌、俳句を日本と英語で学ぶ
- ・伝統楽器を紹介
- ・外国の方に日本の伝統文化を伝える際（発達段階に応じて、地元、県、国の文化、食料）に必要なプレゼンテーション力を身につけたらどうか。※グループ発表でもよし、互いの文化を交流する。
- ・各地域の伝統を取り入れていく。
- ・外国人から見た日本という設定で、小学校では、地域に根ざした内容も扱っていくべき。
- ・まずは、自分の住んでいる地域に関するもの、そこから日本のものへと広げ、なるべく、自分で見る、聞く、やってみるという活動を取り入れることだと思う。
- ・食文化やクールジャパンと言われるような世界に認知されている日本の良さを取り入れたい。深すぎる伝統文化の内容についてはどうだろうか。
- ・まずは、校区（地元）の伝統文化を学び、古くから日本に伝わるものを広く学んでいけばよいのではないだろうか。
- ・衣食住等の子どもたちの身近なもの、生活習慣等→自分と相手と相対的に見つめ、共通点や相違点をきち

んと整理させ、理解させる。そして受け入れる素地へつなげる。

- ことわざを外国での言い回しを比較をする。
- 外国人が日本の伝統文化を取材しているようなTV番組をみるなどして外国が日本をどうみているかという視点から日本を再認識させる
- 外国語活動にでてくる文化等に関することについて、日本の文化と比較することで、共通点や相違点を考えさせ、それぞれのよさや社会背景を考えさせる指導が必要
- (内容) 外国の方々が日本の物に興味をもっていること(例: 着物, 花火, ぼんおどりなど)
(どのように) なぜそれらの物に対して関心があるのかの理由をしっかりとおさえて、外国における文化との違いを比較しながら指導する。
- 食文化(寿司, うどん, てんぷら等)
- あいさつの仕方(礼や返事など)
- 古くから伝わる遊び
- 多様性を認めるように
伝統行事(季節), 食習慣・郷土料理, 衣服(民族衣装), 住(くらし方), 歌やあいさつ, 学校生活など→実演と, 多国のものとの比較体験
- 日本の民謡を英語バージョンで歌う。
- 外国語活動の中で伝統文化を取り入れるならば, 様々な国の文化と共に比較するような形, その中でもそれぞれの良さを見つけていくような形で指導することが必要だと思う。
- 食事, 食文化について, 映像を多くとり入れながら指導するとよいと思う。
- 食文化, 服装などその単元において, 外国の文化を比べながら指導する。

【その他の質問（自由記述） 2】

英語教育を充実させるために、その他に学んでおきたいことが何かあれば、お書きください。

- ・文化、会話等、海外の暮らしぶりについて。クラスルーム・ランゲージなど。
- ・小学校英語学習の目指す姿はどうあればよいのか、中学校英語へどうつながっていくのか
- ・世界での英語の必要性。高校、大学での受験に関する情報。
- ・表情、ジェスチャー？(コミュニケーション)
- ・行政機関との連携の在り方。AEA 等との連携の在り方。英語教育を充実させるにあたっての組織づくり。
- ・授業の始まりと終わりのあいさつの仕方をパターン化するとスムーズに進められると思う。
- ・いろいろなゲームなどをたくさん知り、発音に関してはしっかりできる必要があると思う。
- ・英会話を習っている子も習っていない子と一緒に楽しめる学習をするにはどうしたらよいか。
- ・教職員の研修の充実。
- ・ヒアリング、スピーチ
- ・上の表で十分です。
- ・日常会話
- ・活発な子が中心になりがちであると思うのでおとなしい子たちも楽しめ、私のように苦手意識を持たせないようにする指導法も考え、学んでいきたいと思う。
- ・マナー(日本と違う習慣や失礼にあたる行動)
- ・楽しく学習できるアクティビティを学びたい。発音の違い。
- ・英語教育をする以前に国語力をつけなければ文章もまともに考えられないと思う。英語ばかりに力を入れるのではなく、国語の読解や文章力をつける必要があるのではないかと思う。国語の読みを充実させることさえ今は十分にできない。これでよいのであろうか。
- ・発音とかゲームとか歌とか知りたいです。盛り上がりたいため。
- ・専科をつくって指導することが必要であると考えますが担任が指導するのであれば指導力の向上が急がれるところであると考えます。
- ・伝え方、海外の考え方など。
- ・中学校英語のとの違い、混合しないように。子供が英語嫌いになるのはどういったときなのか。
- ・幼稚園、保育園から英語を取り入れているところが多く、レディネスに差がある状態で小学生になっている実態がある。自宅保育の家庭もあることを踏まえ、いずれ英語も少人数指導が必要になるのではないか。
- ・日本についての全般。
- ・もっと早くから(英語教育、英語ノートが作られたあたりから)計画的に一般教諭への講座を官制研として組むべきだったと思う。英語教育の導入前に問題でスタートが遅れたことが世界を意識した子供教育の遅れともなっている。
- ・英語教育が重要視されている今、その英語教育の必要性を再確認したい。そして子供たちに伝えていきたい。
- ・中学校の指導がどれくらい小学校英語をふまえた指導法に変容してきたか。
- ・英語はもちろん大事ですが、世界には様々な言語や文化があり、それを大切に生きている人がたくさんいます。「英語だけでできればよい」と思う子供たちを作らないためにも、さまざまな文化や言語、違いがあることを伝えていかないといけないと思います。そのためにも教師自身がアンテナをいろんなところにかけて、様々な事象に興味関心を持っていくべきだと思います。
- ・ALT とコミュニケーションをとるための英会話力
- ・ALT, GT との TT 指導のあり方
- ・評価の方法
- ・ICT の使い方
- ・ALT とコミュニケーションが取れるぐらいの英会話ができるようになっておきたい。
- ・ジェスチャーについて
- ・まずは発音をしっかり身に付けたい。そのことで教師は自信をもって指導していけるのではないかと考える。
- ・国際理解教育。開発教育。言語のみに頼らないコミュニケーション能力を培うには
- ・外国語活動が生まれ根付いてきたこれまでの流れや外国語活動が目指してきたものを全ての教員が共通して理解せねば、小学校で行う英語教育は間違った方向へいく。単なる中学校の前倒しの授業ではないこと、小学校教員が小学生と行うからこそ意味がある学習であるべき。教員一人ひとりに丁寧その目的と意義をおろしてほしい。

- ・自分と相手の間に共通の話題を見つけて、自分の伝えたいことをどのように表現するとよいのか基本的な言い回しを身に付けておいたり、相手の話したりしていることのどこに注意して聞き取るようにすると大まかにでもその内容をつかむことができるのか聞き方のポイントを知っていたりすること。
- ・海外留学がしたい。
- ・英語教諭の配置。AEA等の学校専属配置。
- ・外国の文化に触れる
- ・自分自身に語学力がないので、自らの語学力を高めたい。
- ・小中高でどこまで教えるのか。特に中学校で学習することを知ること、小学校での指導が充実すると思う。
- ・クラスルームイングリッシュ、自分自身のコミュニケーション能力
- ・外国の学習環境や状況、具体的なグローバル化進行の実態
- ・クラスルームイングリッシュの習得。
- ・小学校の段階でどこまで指導できるのか
- ・日常的に英語と触れる機会が大切だと考えるので教育課程にどのように位置づけるのか学びたい。
- ・自身の英語力を伸ばす。学習の進め方。
- ・聞く力がとても弱いため、その力を伸ばす方法を学びたい。
- ・1年間の英語の授業の流れ。各学年で身に付けておく内容。
- ・教師の英語に関する積極的な研修はもとより他校の外国語活動の授業について広く知ることが大切だと思う。
- ・英語が文化になっていないのでなかなか難しい。島国で単一民族しかいないので必要性があまりない。その中でどう指導していくか、今後どうやって英語の必要性を高めるかを考えたい。系統的な指導計画の作り方も考える必要がある。また、親しむことと定着することのバランスやアルファベットの読み書きの導入など制度としてまだ向上させてほしい。
- ・英語の専科を作ることが大切ではないでしょうか。小学校に英語教育が入ることなど頭になかったので日本の教育のさまざまな変化についていけない部分があります。大学の教育課程に英語の必修を作るとか工夫が必要だと思います。
- ・特にありません
- ・チャックによる
- ・ALTとの連携
- ・外国の普通の生活
- ・小学校で学級担任が外国語を一人で指導することは限界があると感じている。
- ・英語でのコミュニケーションの取り方
- ・各国の文化
- ・教師との関連で十分かと考えている。
- ・クラスルームイングリッシュ
- ・コンテンツの活用を学んでおくことが大事だと思う。
- ・自分自身の英語の力を向上させたい。
- ・学んでおきたいことというよりもALTやJTEのような立場の方をもっと配置して子供たちが楽しく活動したりきれいな英語を聞いたりする機会を増やしてほしい。一教諭が指導をするには限界があるように思います。
- ・ALTとの連携(打合せが十分に取れないので、当日お互いの連携がとれていないと感じることがある。
- ・いろいろなゲーム活動
- ・英語学習を進めるための道具、ミニゲーム等、チャンツに合わせて提示してあると分かりやすいです
- ・教室英語
- ・ゲームのレパートリーを増やしたい
- ・小学校教諭は教えなければならない教科領域が増える一方…。英語についてもこれ以上、もっとと言われてももういっぱいいっぱいである…。
- ・小中連携
- ・他国の異文化言語に対する理解を深めておくこと。国際理解教育の一貫でもあるということを知っておきたい。
- ・外国の方と触れ合う機会を作りたい。担任だけでなく、ゲストティーチャーが来てくださるとよい。
- ・自己認知…自尊感情を高める指導の在り方。
- ・いろいろな文化に住む人々を認めるということは、まず、身近な場所にいるいろいろな考えの人を認める

ということが基になると思う。人権教育学習は必須だと思う。また、英語教育を充実させることで、人権学習を深めたい。

- ・ソーシャルスキルトレーニング
- ・小学生に英語教育は必要ないと思う。日本はアメリカの植民地ではない。
- ・かんたんな英会話も教師ができること。
- ・指導計画作成
- ・子どもが主体的に活動できるアクティビティについて
- ・英語教育を本気で導入するのであれば、英語の免許が必要だと思います。なので、個々人が「学んでおきたい」ではなくて小学校の教諭全員に「学ばせる！」ぐらいのとりくみをしないと、教えてもらう子どもたちがかわいそうです。
- ・中学校との接続がうまくいく方法について
- ・教室環境の整え方。
- ・教科となった場合の、中学校英語との関連を十分に押さえておく必要があると思う。
- ・児童に英語で話す必然性をどのようにもたせるか、場の設定のバリエーション等学びたい。職員研修等で英語教育に関してする際、先生方自身も楽しみながら研修できる内容を知りたい。
- ・ファシリテーション能力、グルーピング、心理学
- ・英語教育の研修の充実→その方法
- ・国語、日本の歴史文化
- ・コミュニケーション論
- ・IIについて…現場の先生方の意見を聞かずに上意下達の中で英語教育と言われても答えようがありません。それでも英語教育を〜とおっしゃるのであれば、お金をつぎ込んで英語専科（専門）の先生を入れるべきです。
- ・フォニックス、日常会話
- ・学んでおきたいことはないが、単語（英文も）の発音が出せる機会があるといい。
- ・単元的な展開
- ・外国人講師（ALT）の常駐。
- ・日本語と英語は別なものとして教えるのが良いと思う。国語でローマ字を習うが、もう英語で教えるのなら必要ないと個人的には思う。学んでおいた方がいいことともう学ばなくていいこと（学ぶと混乱するもの）は区別する必要があると思う。
- ・英語教育は学級の雰囲気と直結する部分が大いと思う。学級経営は（子どもたちのコミュニケーション作り、構成的グループエンカウンター等）学んでおいていいと思う。
- ・先進校の授業の様子を参観したい。
- ・現在の外国語活動との違い
- ・英語だけでなく、人とのコミュニケーションを取ろうという意欲を持たせる。
- ・中学校英語への円滑な引き継ぎ
- ・子どもが意欲的に（全員が苦手意識をもたない）競争にならないゲーム等
- ・イギリス英語を中心に学んでいきたい。
- ・英語を話せる人たちとのコミュニケーションの場が必要である。研修会で意図的に組んでいかなければ、自主的なサークル活動ではなかなかALTや英語交流（会話、コミュニケーション等）と触れ合う職員の姿が見られないような気がする。その中で視野を広げたり、異文化理解、自国の文化をいかに理解してもらえるかのコミュニケーション能力も培えると考えたい。
- ・日本語教育を充実させたい。
- ・教具の使いかた、カード等
- ・アルファベットをどの段階できちんと指導するのかを学びたい。
- ・小学→中学へ、英語教育をつなげるにはどうするか
- ・小学校の段階ですでに英語が苦手になっている児童への対応（ゲームは好きだが、英語は嫌いという子どもたち）
- ・日常に必要な英語をまずは覚える。
- ・ジェスチャーについて
- ・なぜ英語なのか、そこをはっきりさせる
- ・楽しい授業の流し方
- ・発音の仕方がやはり大切だと思うので、発音やリズムを学びたい。
- ・英語教育とあわせて「日本語教育」も大事にしたいと思います。

- ・ALTとの連携について
- ・クラスルームイングリッシュ，まずは自分が話せないため。
- ・英語環境の整備について
- ・自分たちが中・高で習った英語と，現在の英語授業のちがいを知りたい。